

巻頭言

国立長寿医療研究センター
生活機能賦活研究部
牧迫 飛雄馬

程よいゆとり

“住めば都”ということわざを耳にしたこと、または実際に経験をされた方も多いことでしょう。「慣れてしまえば、どのような場所でも住みやすく自分の都のように感じられる」といった意味合いで用いられることが多いと思います。

私は2013年3月からの約1年間、ブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)へ研究留学をする機会を得ることができました。UBCがあるカナダ西岸のバンクーバーは、世界でも有数の住みやすい都市として知られ、なぜバンクーバーが住みやすいのかが研究されるほどであると聞きます。

個人的な感想ですが、街全体にゆとりを感じます。なぜそのように感じるのかを、日本との文化やパーソナリティの違いに集約してしまうのも釈然とせず、日々を興味深く観察するようになりました。街並や都市構造といった環境の素晴らしさも感じましたが、随所に“程よさ”を感じるがありました。これもあくまでも個人的な感想ですが、街は都会過ぎず(田舎過ぎず)、仕事は忙し過ぎず(暇過ぎず)、人々は多過ぎず(少な過ぎず)、交通網は便利過ぎず(不便過ぎず)といった感じです。このような“程よさ”が生み出すのであろう“ゆとり”を強く感じました。

確かに、都と感じるほどに住みやすい街でしたが、精神的な安心感や生活全般の利便性を考えると、日本の良さを痛感することも多々ありました。よく言われますが、外部から客観的に見て、はじめてその良さに気づくことも多いと思います。近年、理学療法士の職域は、病院や老人保健施設などの医療・介護施設にとどまらず、様々な拡がりを見せています。これまでは連携することが少なかった職種と協働で事業に取り組んだり、新たな体制作りを期待されたりすることも少なくないと思います。このような動きは、理学療法士への需要があってもこそかもしれませんが、様々な分野に足を踏み入れることで、これまで気づけなかった理学療法の良さ、または足りない部分も見えてくるかもしれません。

“程よさ”の定義は個人で異なるものだと思いますが、“程よいゆとり”を持って、積極的に様々な分野へ視野を拡げることは、理学療法の新たな良さに気づくと同時に、個人としての将来の拡がりに大きなきっかけとなることと信じています。慌ただしい日々のなかでも、“程よいゆとり”を持って本誌に触れることが、将来の発展のきっかけとなるヒントを発見することにつながるものと期待しています。
